

学生による授業評価アンケート調査報告と考察

——過去4回の授業評価アンケートデータをベースにして——

出 口 博 章

目次

1. はじめに
2. 授業の改善とFD活動の重要性
3. 授業評価アンケートの目的
4. 授業評価アンケートの実施概要
5. 授業評価項目に関する分析と考察
6. 授業評価アンケート改善への提案
7. 八戸大学の教育の質向上提案
8. 八戸大学における関連研究の紹介
9. まとめ

1. はじめに

八戸大学は、教育の質の向上を目指して教育内容や教育方法の改善に取り組む必要がある。FD委員会は、教育の改善を実現するための手段として各種の活動を実践しているが学生による授業評価アンケートは、FD委員会の具体的な活動の中の1つであり教員の教育力向上に向けた重要な活動である。

八戸大学における学生による授業評価アンケート実施の歴史は古く、平成12年から断続的に実施していた。しかし、継続的に定着したのは平成18年度以降である。

平成20年度に学長の指示により「大学の教育の向上を目指したFD活動の必要性」を強調して、ライン組織の教務部とは別に新しい支援組織として全学のFD活動の中核となるFD委員会をスタートさせた。それまで、教務部が担

当していた授業評価アンケートの計画、実施をFD委員会に移して実施することとした。

本報告書はFD委員会が実施した過去2年間の4回分(20年度春、秋、21年度春、秋)の授業評価アンケートのデータと分析をまとめたものである。毎回アンケートの都度、報告書は作成されている(20年度秋、21年度春、21年度秋授業評価アンケート報告書参照)が今回1つの区切りとして4回分を改めて網羅的に作成するものであり、大学紀要を報告の場としているが研究論文としての内容は含んでいない。しかし、報告書の最後にアンケートデータの分析と考察をベースにして関連する大学の教育の質向上に向けた改善を提案している。また、過去の八戸大学の授業を対象にした研究論文を2件紹介した。

本報告書をまとめるに当たり文献(南学, 2003), (星野・牟田, 2006), (片山, 2008), (立教大学, 2008, 2007)を参考にした。

2. 授業の改善とFD活動の重要性

大学におけるFD活動の必要性に関する法的根拠は、大学設置基準第25条の3において「大学は、当該大学の授業内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」としてFD活動が義務化された。

大学における社会科学系の学習形態は伝統的な対面集合講義が中心である。集合講義は体系化、構造化された専門知識、概念や理論を伝達する手段としては効率的な学習形態であるが、例えば学生が「聴いて理解する」ことが中心の消極的学習形態であり「学生に考えさせる」「教員や学生同士の双方向コミュニケーション」等の積極的な学習の側面が、学生が多数なこともあって講義の中で実践することは少ない。少人数教育を掲げる八戸大学としては伝統的な講義だけでなく八戸大学の学生に適合したきめ細かい学習も探索することが必要であると考えている。

一般に言われている学力、学習意欲の低下等学生の学習への取り組み姿勢の変化を受けて伝統的な講義方法の形態も変化する必要がある。すなわち、何を教育するかという教育課程（カリキュラム）に加えて教育の質向上を目指す教育方法の改善もより重要であると考えられる。

八戸大学は地域の社会科学系の単科大学であるが、入学する学生の学習特性も変化しており、学力や学習意欲に関し経年的に低下していると経験上からも認識している。今後、FD活動を通して大学の教育の質向上を目指して講義学習の形態も含めた教育方法全般の改善に取り組む必要がある。教育方法の改善は、教員個人レベルの教授法の改善と組織レベルとしての八戸大学の教育力の向上の両面からアプローチする必要がある。

3. 授業評価アンケートの目的

「学生による授業評価アンケート」は、個々

の教員が自らの授業方法の研究、工夫を積極的に推進し自主的、主体的に授業改善に活用することを目的としたものである。授業評価が不適切な意味での教員へのプレッシャーとなることは、回避しなくてはならない。

また、この「学生による授業評価アンケート」により、学生の自覚や積極的な学習への参加態度を促し、教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が高まることも期待したいと考えた。しかし、現実には学生の学習態度・意欲・学力低下など問題も多く、切磋琢磨というような関係は、短期間に実現されるものではない。フィードバックされた評価アンケート結果を振り返り、さらに各教員がそれぞれの講義に対するポリシー、自らの教育経験、教育的見識を加えて、各自の授業に対する工夫を積み重ねることによって、八戸大学の学生の現状実態に適合した教授力の向上が狙いである。

一方この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは、あくまで教員自身がこれをもとに自らの講義を再評価・検討することになり、教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理に活用されることは排除しなくてはならない。また、現段階では、このデータを、教員同士の相互評価や、カリキュラムの有効性を測定するための資料として利用する段階には至っていない。

20年度から新設されたFD委員会の合意として、授業評価アンケートはあらためて以下の目的に限定している。

- ① 教員が自らの教授方法を改善するための自己研修の資料を得ること。
- ② 学生の学習姿勢に関する情報を得る。
- ③ 学生の授業への期待のあり方を知る資料とする。(自由記述)
- ④ 学生が講義履修への積極性と責任意識を高めること。

4. 授業評価アンケートの実施概要

(1) 過去4回実施授業評価アンケートの科目数と回答者数

過去4回分の授業評価アンケートの実施概要を表1に掲げる。

20年度春の回答は、4件法（4段階評価）、20年度秋以降の回答はすべて5件法（5段階評価）と異なる。5件法は間隔尺度として扱えるが4件法までは順序尺度として扱うのが通常なので20年度春と20年度秋以降の評価得点を直接対比することは困難である。したがって、同一アンケート内における相対的なデータをアンケート間で対比する場合以外のデータの直接対比は20年度春を除いて過去3回分で行うこととする。また、20年度春データのグラフ表示や分析等の考察では留意しなければならない。

(2) アンケート対象科目の選択

基礎ゼミ、専門ゼミ以外のすべての科目を対象とした。ただし、履修性が15名以下の科目はアンケート調査を実施するかどうかは教員の判断に任せた。また、ほとんどのゼミが15名以下である。15名以下の科目を対象とするかどうかは任意とした理由は統計処理上のサンプル数として少ないという理由である。ただし、

表1 過去4回分授業評価アンケート実施要領

アンケート実施時期	科目数	回答者数 (延べ人数)	備考
20年度春	95	3,140人	記名回答、回答4件法、評価項目同じ
20年度秋	86	2,474人	記名回答、回答5件法、評価項目同じ
21年度春	77	2,677人	記名回答、回答5件法、評価項目同じ
21年度秋	72	2,573人	記名回答、回答5件法、評価項目同じ

科目担当の教員の自主的な判断でアンケート調査することは妨げないとした。

今回の授業評価における質問項目（以下授業評価項目と言う）は、社会科学系大学の伝統的な講義を対象にした評価である。したがって、少人数でのコミュニケーションを主体とするゼミ等に対して当該アンケート授業評価項目は妥当ではないと考えて対象とはしなかった。しかし対象科目の中には、実技を含む体育系科目は対象の中に入っている。この、対象科目の選定の基準は過去4回のアンケートで変更していない。

(3) 実施期間

学期末の最後の2週間前の1週間の中で一斉に実施した。

(4) アンケート記名/無記名と回収方法

記名式のアンケートの場合、回収方法としては、教員がそれぞれの講義の中でアンケート用紙を配布、説明した上であらかじめ依頼した学生が回収し速やかに事務局に提出するという方法をとった。この回収方法は、教員が回収した調査結果に一切タッチしていないことを学生に対して担保するためである。

(5) 授業評価項目と分類

過去4回の授業評価項目は変更がなくほぼ同一であり、表2に掲げる。

表2 授業評価項目

分類と番号および評価項目	キーワード
学生属性	
1.a 性別と所属学部	1.a 性別と学部
1.b 学年	1.b 学年
1.c 所属する課外活動クラブ	1.c 課外活動所属
学生の授業への取組	
2. あなたの授業の出席状況は、良かったと思いますか。(カッコ内は欠席回数)	2. 出席状況

<p>3. 望ましくない授業態度で講義に出た回数は、何回ですか。(ノートを取らない・居眠り・私語・メール・ゲーム・音楽を聴くなどの行為を少しでもした授業回数)</p> <p>4. 授業に必要なものは必ず持参し、毎回真剣な姿勢で授業に参加したと思えますか</p>	<p>3. 授業態度</p> <p>4. 積極的な受講</p>
<p>授業内容</p> <p>5. シラバスの記載が、講義を理解する上で役立ったと思えますか。(ただし履修に際し、シラバスを十分検討していない場合は、いずれにも〇せず、無回答としてください。)</p> <p>6. 教員の講義準備は、十分なされていたと思えますか。</p> <p>9. 講義内容は、毎回良く理解できたと思えますか。</p>	<p>5. シラバスの有効性</p> <p>6. 講義準備</p> <p>9. 理解度</p>
<p>授業方法</p> <p>7. 板書(またはスライド・配布資料など)は、分かりやすかったと思えますか。</p> <p>8. 教員の講義の声は、聞き取りやすかったと思えますか。</p> <p>10. 一回の講義での学習の分量は、適切だったと思えますか。</p> <p>11. 講義が静かに保たれるよう、教員は注意するなど適切な対応をしたと思えますか。</p> <p>12. 教員は、学生に質問をする、感想文等、学生に働きかけをしたと思えますか。</p> <p>13. 講義は、開始終了時間が守られるなど、全体的に円滑に行われたと思えますか。</p>	<p>7. 板書</p> <p>8. 講義の話し方</p> <p>10. 講義の分量</p> <p>11. 授業管理</p> <p>12. 学生への働きかけ</p> <p>13. 授業時間</p>
<p>総合評価</p> <p>14. 全体的に見てこの講義は、あなたにとって満足のいくものだったと思えますか。</p>	<p>14. 満足度</p>

(注1) アンケートの各質問を以下授業評価項目と表現する。

(注2) 上記表2の分類とキーワードは筆者が独自に設定したものである。

(6) データの集計の種類

アンケートデータの集計結果により毎回以下の種類の表を作成している。

① 全科目別データ

全科目の科目別の評価項目毎の5段階評価の度数表と相対度数表および平均グラフをセットにした集計表。

② 全教員別データ

上記①のデータを教員別にまとめた集計表。

③ 科目別生データ一覧

全科目の生データを区切りなく一覧表にした表。

④ 科目別度数表(平均付)

上記③のデータを科目ごとに区切った表。

⑤ 科目別相対度数表

上記④のデータの相対度数表。

⑥ 全科目一覧表

全科目別、評価項目別平均値を一覧にした表。

⑦ 全科目相対度数表

全科目をまとめて評価項目別の相対度数表。

⑧ 全科目度数表(平均付)

全科目をまとめて評価項目別の度数表。

(7) 各教員へのフィードバックデータ

各教員には上記の②の教員別データをフィードバックしている。

(8) 評価点の算出式

5件法による回答の場合、各評価項目に対し1~5の段階評価で行い、肯定的な評価には高い値を配点した。各評価項目の評価点は、次のような式により評価平均値として算出した。

$$\text{評価平均値} = \{(5 \times \text{人数}) + (4 \times \text{人数}) + (3 \times \text{人数}) + (2 \times \text{人数}) + (1 \times \text{人数})\} \div (\text{回答人数})$$

表3 科目別授業評価一覧表

科目区分キー	科目名	教員名	人数	Q2 平均値	Q3 平均値	...	Q14 平均値
キー1	科目1	名前1	人数1	平均21	平均31	...	平均141
キー2	科目2	名前2	人数2	平均22	平均32	...	平均142
キー3	科目3	名前3	人数3	平均23	平均33	...	平均143
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	...	⋮
キーn	科目n	名前n	人数n	平均2n	平均3n	...	平均14n

(9) 主な分析対象データ

- ① 科目別、授業評価項目別の評価平均値の一覧表が以下の分析における主な分析対象データである。一覧表のイメージは表3の通りである。
- ② 科目別授業評価一覧表のイメージ（表3参照）
- ③ 分析において科目毎の履修人数データは使わず各科目の履修人数に関係なく同じウェイトとした。

5. 授業評価項目に関する分析と考察

(1) 分析と考察の視点

表2の授業評価項目の集計データから何を分析するかの方針の視点について記述しておく。

- ① 学生側の評価項目分析
 - * 学生が授業にどう取り組んでいるかその取り組み姿勢を分析する。即ち学生が自らの出席状況、授業態度、積極的な受講を自己評価としてどう評価しているかを分析する。
 - ② 教員側の評価項目分析
 - * 全科目を対象にして、過去4回分アンケート調査を通して評価点が高位、低位、中位の授業評価項目を抽出する。つまり、授業

評価項目の中で学生評価の高い項目と低い項目を抽出する。

- * 学生の「授業への取り組み姿勢（Q2, Q3, Q4）」と授業評価の関連性。授業評価アンケート調査の信用性の分析。
- * 「履修人数」や「学生属性」によって評価がどう異なるかの分析。例えば、人数の多い科目ほど評価は下がると言われている等の分析である。

③ 授業評価項目の統計分析

* 授業評価項目間の相関分析

科目別授業評価項目一覧表を対象にして授業評価項目間の相関分析を試みた。相関分析によって授業評価項目の有効性を分析する。

④ 教員個人レベルの分析

- * 評価得点の高い科目と低い科目を比較して授業評価項目の得点に何らかの相違点があるかを分析する。

以下分析と考察の視点に沿って分析・考察の結果を記述する。

(2) 学生側の評価項目分析と考察

- ① 学生の授業への取組に関する評価項目は下記の3項目である。参考のために質問の得点を含む全文を掲げる。

* Q2: 出席状況

あなたの授業の出席状況は、良かったと思いますか。（カッコ内は欠席回数）

0回：5, 1~2回：4, 3~4回：3, 5~6回：2, 7回以上：1

* Q3: 授業態度

望ましくない授業態度で講義に出た回数は、何回ですか。（ノートを取らない・居眠り・私語・メール・ゲーム・音楽を聴くなどの行為を少しでもした授業回数）

0回：5, 1~2回：4, 3~4回：3, 5~6回：2, 7回以上：1

* Q4: 積極的な受講

授業に必要なものは必ず持参し、毎回真剣

な姿勢で授業に参加したと思いますか

② Q2～Q4の過去3回分の平均値

過去3回分のQ2～Q4の全科目平均値を表4に、グラフは図1に示す。

③ 考察

*Q2～Q4間平均値の比較では、過去3回において下記の傾向がある。

Q2<Q3<Q4(20年度秋のQ3を例外として)

*Q2～Q4に関し20年度秋に対して21年度春ですべて上昇したが21年度秋すべて若干下がった。これは春学期と秋学期を比較して秋学期の方が下がる傾向があるという一般的な動向とも推測できる。

*20年度春は4件法の評価のために直接比較対象から除外した。

*Q3の項目(授業態度)とQ4の項目(積極的な受講)の相違点が学生から見て若干不明確ではないかと感じている。学生はどう

区別しているか調査する必要がある。

(3) 教員側の授業評価項目分析と考察

① Q5～Q14の過去3回分の平均値

過去3回分の評価項目Q5～Q14のデータに対して統計的検証も含めて評価が高位、中位(上位、下位)、下位の評価項目に分類した。平均値データとそのグラフを表5、図2に示す。

② 授業評価項目の分類結果

この分類は、20年春も含めて4回のアンケートデータのほぼすべてのアンケートにおいて表6に示す分類結果(a, b, c, d)が得られた。表6は4回分の分類結果が下記に示す通りほぼ同じであることを示している。

a: 高位の項目: Q6, Q13

b: 中位の上位: Q8

c: 中位の下位: Q7, Q10, Q11, Q12, Q14

d: 下位: Q5, Q9

(注) 分類間は統計的有意差(独立したグループ間の平均値のT検定, $P<0.05$)が得られた。

③ 考察

過去3回分のQ5～Q14に対する評価結果の考察から下記のことが言える。

*Q5に対する評価が低い。シラバスは有効

表4 過去3回分Q2～Q4全科目平均値

	q2	q3	q4
20年度秋学期	3.98	3.89	4.1
21年度春学期	4.01	4.08	4.22
21年度秋学期	3.95	4.02	4.17

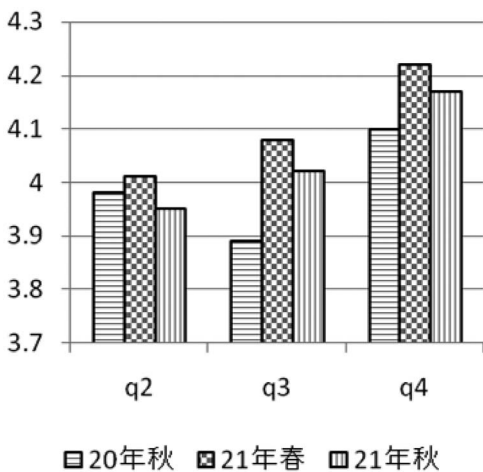


図1 過去3回分Q2～Q4全科目平均値

表5 過去3回分Q5～q14全科目平均値

	20年秋	21年春	21年秋
q5	3.89	3.86	3.78
q6	4.31	4.32	4.28
q7	4.03	4.05	4.09
q8	4.16	4.18	4.15
q9	3.87	3.89	3.9
q10	4.02	4.09	4.06
q11	4.14	4.15	4.12
q12	4.1	4.06	4.08
q13	4.23	4.26	4.21
q14	4.07	4.1	4.12

に機能しているか疑問である。

*Q9 に対する評価が低い。講義内容を理解していない学生が多いと考えられる。

*Q6, Q13 に対する評価は高い。教員が講義準備は十分行われている。また、講義の開始終了時間が守られるなど、全体的に円滑に行われたと学生は考えている。

* 講義の場の管理や講義内容 (Q7, Q10, Q14, Q8, Q11, Q12, Q13) に対する工夫に対する評価は上記 ③④ の中間的な得点となった。

(4) 「学生の授業への取り組み」によって授業評価傾向が異なるかに関する分析 (20 年度秋学期データに対して分析した)

① 学生の授業への取り組み (Q2, Q3, Q4), と講義評価 (Q5~Q14) の関係に関する分析

学生の授業への取り組みが Q5~Q14 の評価に影響があるという経験的な仮説を検証した。

以下の分析は、Q2, Q3, Q4 毎の全科目平均値より上位科目と下位科目の 2 つのグループ化した上で、独立したサンプルの平均値の T 検定によって Q5~Q14 の平均値を比較した。20 年度秋学期データを対象に分析した。(20 年度秋学期報告書参照)

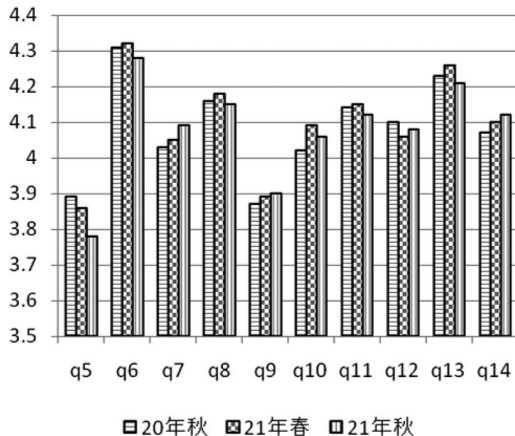


図 2 過去 3 回分 Q5~q14 全科目平均値

*Q2 の出席状況の全科目平均値が 4.0 以上のグループと未滿のグループの Q5~Q14 について比較した。Q5(シラバスの有効性)は有意差 ($P<0.05$) が出て出席状況が良好な科目ほど得点は高いという結果が得られたがそれ以外のすべての評価項目に関して有意差が出なかった。

*Q3 の授業態度の平均が 3.9 以上の科目グループと未滿の科目グループでは、評価項目の平均値に差がある。

Q3 の全科目の平均値は 3.9 であるがこの平均値以上の科目と未滿の科目では、Q9, Q10 を除いてすべて他の評価項目では有意差が認められ、Q3 が 3.9 以上の科目ほど高い得点を示した。

*Q4 の授業を受ける準備と真剣さが 4.1 以上の科目グループと未滿の科目グループでは、評価項目平均値に差がある。

Q4 の全科目の平均値は 4.1 であるがこの平均値以上の科目と未滿の科目では、すべての評価項目においても有意差がみとめられ、4.1 以上の科目ほど高い得点を示した。

② 考察

下記のようにまとめることができる。

*学生の授業態度の平均値が高い科目ほど評

表 6 過去 4 回分 Q5~q14 全科目平均値分類結果

	20 年春	20 年秋	21 年春	21 年秋
q5	2.9d	3.89d	3.86d	3.78d
q6	3.2a	4.31a	4.32a	4.28a
q7	3.1c	4.03c	4.05c	4.09c
q8	3.1b	4.16b	4.18b	4.15b
q9	2.9d	3.87d	3.89d	3.9d
q10	3.1c	4.02c	4.09c	4.06c
q11	3.1b	4.14b	4.15c	4.12c
q12	3.1c	4.1b	4.1c	4.08c
q13	3.2b	4.23b	4.26a	4.21a
q14	3.1c	4.10c	4.10c	4.12c

価項目の平均値が高い。

*学生の授業を受ける準備と真剣さの平均値が高い科目ほど評価項目の平均値が高い

*21年度春データのデータにおいても上記と同様の傾向が見られた。

(5) 履修人員の多少によって授業評価の傾向が異なるかに関する分析 (20年度秋学期データに対して分析した)

① 履修人数の多い/少ない科目によって授業評価の平均値に差があるか。

*科目の履修人員が平均履修人数 (28.8人) 以上(コード1)と未満(コード2)のグループに分けて授業評価項目 Q5~Q14 の平均値を比較した。

結果として、Q9、Q10を除いたすべての評価項目で有意差が認められ、履修人数が少ない方が高い得点を示した。

*21年度春データのデータにおいても上記と同様の傾向が見られた。

(6) 相関関係による授業評価項目の分析

科目別、評価項目別一覧表データの分析において評価項目間の相関係数を算出した。特にQ14(総合評価、満足度)との相関関係に着目した。

<20年度春学期データ>

① 20年度春学期データにおいてすべての授業評価項目間で例外なく強い相関関係がある。

*総合評価(Q14)と相関関係が特に強いのは、Q10: 0.940, Q9: 0.938, Q8: 0.934, Q7: 0.931, Q6: 0.913

*相関係数が相対的に低い評価項目でも、Q2: 0.644, Q4: 0.775と高い相関関係を示した。

<20年度秋学期データ>

② 20年度秋学期データにおいてすべての授業評価項目間で例外なく強い相関関係がある。

*総合評価(Q14)と相関関係が特に強いのは、Q9: 0.940, Q10: 0.929, Q6: 0.921, Q7: 0.904, Q12: 0.894

*相関係数が相対的に低い評価項目でも、Q2: 0.651, Q3: 0.740と強い相関関係を示した。

<21年度春学期データ>

③ 21年度春学期データにおいてすべての授業評価項目で例外なく強い相関関係がある。

*総合評価(Q14)と相関関係が特に強いのは、Q13: 0.954, Q10: 0.952, Q9: 0.947, Q6: 0.944, Q8: 0.930, Q7: 0.912

*相関係数が相対的に低い項目でも、Q2: 0.776, Q3: 0.806と強い相関関係を示した。

<21年度秋学期データ>

④ 21年度秋学期データにおいてすべての授業評価項目間で例外なく強い相関関係がある。

*総合評価(Q14)と相関関係が特に強いのは、Q10: 0.964, Q9: 0.960, Q7: 0.949, Q6: 0.943, Q13: 0.932

*相関係数が相対的に低い項目でも、Q2: 0.675, Q3: 0.783と強い相関関係を示した。

⑤ 考察

*すべての年度においてQ14と他の授業評価項目間で互いに強い相関関係がある。

*Q10, Q9, Q7, Q6はすべての年度で共通的にQ14(総合評価、満足度)との相関が特に強い。

*他の評価項目とQ14の相関係数もすべて強い相関関係を示している。

*しかし、相関係数が強い中であって「学生の授業への取り組み(Q2, Q3, Q4)」はQ14との相関は相対的に低い。

*上記の分析から下記のようないくつかの可能性が考えられる。

*評価項目のどれかの評価を高める努力をするとQ14(満足度)評価項目の評価も高ま

る可能性があることを示している。

- * 評価項目が互いに独立性が低く、すべての評価項目がほぼ同じ内容について測定している可能性がある。
- * 相関係数が強い要因として学生は自分自身の「学生の授業への取り組み (Q2, Q3, Q4)」に対する評価以外の授業評価項目に対しては同一得点にマークする傾向が考えられる。その場合学生評価の信用性または評価項目の妥当性が問題となる。
- * 相関関係の分析結果から Q14 と他の評価項目との相関関係が強い要因がどうであれ授業評価項目を見直す必要性を示唆している。

(7) 実行できなかった分析

今回データの準備の都合等で実行出来なかったデータ分析を次に列挙する。これらの分析は次回からのアンケートの分析において逐次実施することを予定している。

① 学生の GPA 成績とリンクした分析

記名式のアンケートデータにおいて氏名と学生番号が入力されている。氏名が記入された個別学生の生データは一般教員に公表しないことになっている。しかし、FD 委員会の委員は統計処理データとして利用することは許容されていると考えている。学生番号とリンクさせた GPA 成績と学生の評価との関係を分析することによって例えば学生の GPA 成績によって学生の授業評価基準が異なるのではないかという仮説などを検証することができると考えている。

② 科目特性とアンケート評価の関係の分析

教養科目、専門科目等科目特性によって授業評価が異なるか等の分析を計画しているが、科目のコード体系が未整備のために次回以降の分析とした。

③ 教員個人別科目個別のデータ分析

科目全体の一覧票を対象にした分析に対して、教員個人や個別科目のデータを対象にした

データ分析も必要であると考えている。

連続して評価の低い科目と高い科目を抽出してその評価項目のデータに関し何らかの共通的特性があるか探索する。

④ 学生の自由記述および教員の所見と評価得点の関係の分析

学生の自由記述と評価得点を受けて教員の所見票が適切で整合しているかまた改善策が記述されているか等を分析する。

6. 授業評価アンケート改善への提案

(1) 授業評価項目の再検討

過去 4 回のアンケートデータ分析から、授業評価項目に関し下記の点を問題と考えた。特に相関分析の結果からも評価項目の再検討を提案する。

① Q3 と Q4 の見直し

Q3 と Q4 は 4 回のアンケートすべてにおいて相関係数が 0.9 以上となっている。両項目の相違点が学生にとって分かりにくいのではないかと考えられる。

② 講義内容に関する評価項目の検討

現在の授業評価項目は、教員の講義の場における管理と講義のプレゼンテーション技術に関する評価項目が主体となっているが講義内容（興味の程度、講義の難易度、わかりやすくする工夫、意欲を高める工夫等）に関する評価項目が若干不足しており再検討する必要があると考えている。

③ 講義技術に関する評価項目の検討

板書の仕方やノートの取りやすさ等に関する評価項目も重要であると考えている。

④ 学生の学習態度に関する評価項目

「授業の予習・復習に毎週当たった時間」等の評価項目が不足していると考えている。

⑤ その他

教室の環境等に関する評価項目の検討。

(2) 八戸大学学生にとって必要な講義要件の検討

学生満足度を高める評価項目だけでなく学生にとって抵抗があっても八戸大学学生にとって必要な講義要件を洗い出した上で適切な授業評価項目を設計する必要がある。

学生は評価が甘く、講義の負担が少なく、分かりやすく、講義中に指名されるなどの緊張感が少ない講義の評価が高くなる傾向がある。

① 日常学習を定着させるため宿題を課したり、講義中に学生が緊張感を継続する工夫として質疑応答等の教員と学生間のコミュニケーションに関する評価項目も必要である。

② 評価項目数はフェーシングの学生属性項目と総合評価を除いて20項目程度までは許容されるのではないかと考えられる。

③ 評価項目検討のアプローチの基本は、一般論ではなく八戸大学の学生にとって必要な講義の要件を洗い出した上で学生に評価をさせることが有効な評価項目を設定することが必要である。

(3) 授業評価アンケート結果の活用と発展

過去4回の授業評価アンケート実施によって、教員の教授法に対する認識が高まったと考えている。

今後、アンケート調査改善の方向としては、アンケート調査の実施段階から結果の活用と成果を担保する段階に進む必要がある。アンケート調査結果に基づいて教員が自らの教授法の改善に取り組んでいるかは必ずしも検証されていない。各教員の改善努力はすべて教員の自習性だけに任すのではなく改善努力を担保するための方策を検討する必要があると考える。

さらに、アンケート調査は果たして1年に2回必要かも再検討してみることを提案する。回数を減らしてでも1回のアンケートから得られる情報を充実させる方が有効である。現状のままでは、実施することが目的化しややマンネリ化する恐れがあるのではないかと考える。

(4) シラバスに関する討論

過去4回のアンケート調査結果はシラバスが有効に機能していないことを示している。アンケート結果を踏まえてシラバスの機能や位置づけを再定義した上シラバスの書式や内容について再検討する。例えば講義方法に関する項目を追加する等である。

また、学生がシラバスを履修科目選定時に吟味するような工夫等の検討である。教員もシラバス遵守する意識を高める工夫等の検討がある。

(5) アンケート調査の整理と体系化

FD委員会、学生部、基礎ゼミ等各部門が行っているアンケート調査を目的別に整理して結果を体系的に分析できるようにアンケート調査の実施、集計を含めて体系化する必要があると考えている。

7. 八戸大学の教育の質向上提案

FD活動を教員の個人レベルの教授力の向上という側面に加えて大学の組織レベルの教育の質向上に向けた教育力の向上も目指す活動に発展させることが期待されている。

八戸大学の学生特性に合致した教育方法を中長期課題としてFD活動を通じて探索するための考え方を提案する。

(1) 授業方法の改善

大学授業方法は、構造的に以下のようなフレームワークで構成されていると考えている。

① 授業形態：対面集合（講義）、対面分散（テレビ会議、遠隔対面）、非同期分散（eラーニング）、ブレンデッド教育

② 授業方式：講義、実習、演習、体験、トレーニング/ドリル

③ 授業手法：伝統的講義（一方向講義、双方向講義）、協調学習、グループ学習、PBL

④ 講義技術・管理：学習内容に関し学生に

興味を持たせる工夫（理解させる工夫）、声が聴きやすい、板書が上手、教室管理（時間を守る、私語に対して注意する）がしっかりしている、宿題を提示する、質疑応答等双方向性を重視する、PCの活用、ミニッツペーパーの実施等。

提案は、これらの方法を組み合わせて八戸大学に適合した教授法を組織として探求することである。

通常、大学の学習は対面集合形態が主体であり授業方式や講義手法としては一方向型の講義である。この上に立って各種の講義技術・管理を実践している。現行の授業評価項目もこの講義技術・管理に関する評価である。しかし、授業形態、授業方式、授業方式の組み合わせも試行的に実践して新しい方法も開発することを提案したい。

最終的には学生募集の強力な魅力の1つとして八戸大学の特色ある教授法を設計・実践して大学のステークホルダーに教育サービスのメッセージとして伝えることが重要である。

大学の教育的魅力を教育課程（学部・学科）と教育方法の2つの側面から構成する必要があるというのが基本の考え方である。

(2) PDCA サイクルの組み込み

GPAの導入、教育実態の計数的把握、情報の収集・蓄積・共有およびフィードバックの仕組みの構築（PDCA サイクル）を提案する。

① 標準算式の GPA システムの導入

学生の授業成績を把握する指標を定め、継続的にデータを蓄積する。現在も GPA 得点は個人別に計算されているが標準的 GPA 算出方法にはなっていない。GPA の導入は、カウンセリング等関連教育施策の導入とセットにする。

② 学生データベースの蓄積・共有

GPA データを含む、種々の学生個別データをデータベースとして教員間で共有可能とし、教員の指導支援データとして提供すると同時に組織レベルの教育施策設計のデータとしても活用可能とする仕組みを構築する。

(3) 特色ある教育方法の構築

学生募集における大学の魅力として学部・学科（カリキュラム）の魅力と教育の質の側面として特色ある教育方法も魅力を構成する重要な要素である。カリキュラムと教育方法の両面から大学の魅力や強みを構築するというまず目標設定が必要と考えている。

FD 活動の延長上に教育方法に関する大学の魅力を構築するという目標を掲げることを提案したい。この場合、八戸大学学生の現状と特性に合致することが重要である。また、教育方法に関する大学の魅力・強みは大学のステークホルダーの関心とニーズを反映していなければならない。

(4) その他

八戸大学でも個別の教員が実践しているがミニッツペーパー等多くの大学で定着している方法を組織として導入することを提案する。

8. 八戸大学における関連研究の紹介

八戸大学の授業を対象にした授業方法に関する研究論文を2件紹介する。

1件目は、授業方法に関する学生満足度の規定要因を学生アンケートによって調査した研究と、もう1件は同じく講義方法の改善を目指した新しい学習方法（ブレンデッド学習）の実践に関する研究の2件を紹介する。ただし、論文中から本報告書と関連があると考えられる部分を引用および参照した。これら2件の研究は両方とも八戸大学紀要に発表された論文であり八戸大学の講義を対象にしている点と講義方法に関連する研究である点が共通している。

(1) 文献（鈴木, 2008）の研究紹介

この研究の目的は、コンジョイント分析を用いて、大学生の授業満足度に影響を与える要因を明らかにすることである。149人の大学生が調査に参加した。得られたデータに対し、コンジョ

イント分析とクラスター分析を行った結果、授業満足度に関して異なる評価基準を持つ4つのクラスターが見出された。

第1クラスター(30名)は「教員の声の聞き取りやすさ」を重視する傾向が認められた。次は「成績評価」の重要度が高く、成績評価が厳しい方がよいと評価される。次に高い属性は「ノートとの取りやすさ」であり、ノートの取りやすい授業ほど高い評価を受ける。さらに、授業の内容が難しく、発言を求めることが多い授業ほど良い評価を受けることが示唆されている。

第2クラスター(25名)は回答者の授業満足度は、「私語に対する注意」によって規定されている。すなわち私語に対する注意する教員の授業を高くする一方で「学生の発言に対する促し」はほとんど関係しない。

第3クラスター(58名)の最も重要度が高いのは「授業内容の興味深さ」であり、授業内容が興味深いほど選好される。次に重要度が高いのは「ノートの取りやすさ」である。成績評価が甘く、声が聞き取りやすい授業が評価されやすいことが示されている。一方「学生の発言に対する促し」の重要度は低い。

第4クラスター(29名)の回答者の結果は、学生に対する発言を求めることが少なく、授業の内容が易しい授業が評価される。

以上から、クラスターによって授業満足度に対する評価基準が異なることが検証された。

上記は、文献(鈴木, 2008) PP57~PP60より引用した。

(2) 文献(出口・木鎌, 2008)の研究紹介

本研究は、伝統的な講義形態の学習とWeb上の学習を融合したいわゆるブレンデッド型学習形態を構成した。この学習形態の上で知識伝達を主体とする一方向性の講義とWeb環境における双方向性の協調学習連携させた新しい学習方法を実践した。

経営情報関連の専門科目3科目と教養科目2

科目を対象とし、平成15年度~18年度の4年間実践した。

ブレンデッド学習形態の実践の中で、各種の教育手法を展開し、学生が活発に授業に参加する手法を探索しようとした研究である。本研究が目指す望ましい学習とは、伝統的な講義という大枠の中でオフキャンパス上のWeb学習を導入して、学生が単に講義を聞いて理解するという消極的な学習から、自ら主体的に考え発言やレポートで情報を活発に発信する積極的な学習である。

このような、学習方法は、学生の負担が大きくまた、講義中でもWeb上でも活発な発言を求められるので学生の一部では抵抗があり、本学の学生が最も不得意とする学習方法であると考えている。

9. まとめ

FD委員会が新しい組織としてスタートして以来4回ほぼ一貫性のある「学生による授業評価アンケート調査」を実施した。その成果として教員が自らの講義方法に対する振り返りを通して意識を高めるという第1段階の効果はあったと考えている。一方アンケート調査を実施することが目的化して形骸化している側面もあるのではないかと感じている。

改善提案にも述べたが現在実行している評価項目は講義方法の主として管理やプレゼンテーションの側面を評価する項目が主体となっている。

文献(鈴木, 2008)の紹介でも述べたが学生は「学生の発言に対する促し」や「厳しい評価」「負荷が大きい」授業に対しては抵抗がある傾向があり評価は下がる可能性がある。八戸大学の学生にとって教員の観点から必要な講義方法の要件を時間をかけて洗い出した上で評価項目を再設計する必要があるのではないかと考えている。教員が個人レベルで自らの教授法を改善するだけでなく大学が組織として教育力を高め

るための教育施策を設計するための情報を得る評価項目も必要があると考えている。手段としては必ずしもアンケート調査という方法でなくてもよく指定した学生からの面談という方法も考えられる。

教育の質向上の立場から八戸大学の学生に適合した特色ある学習方法とは何かを追求し大学のステークホルダーに対してアピールメッセージを構築し学生募集に結び付けたいと考えているが、FD活動や授業評価アンケート調査もその一貫として機能することを願っている。

参考文献

(南学, 2003)

南学 2003 学生による授業評価の信頼性と妥当性に関する検討 松山大学論集 第14巻 第6号 2003

(星野・牟田, 2006)

星野敦子・牟田博光 2006 大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係 日本教育工学会論文誌 29(4), 463-473 2006

(片山, 2008)

片山章郎 学生による情報科目の授業評価に対する報告(その2) 順正短期得大学研究紀要 第37号 9-19 2008

(立教大学, 2008, 2007)

立教大学, 2008, 2007度「学生授業評価アンケート」報告書 2008年11月

(出口・木鎌, 2008)

出口博章・木鎌耕一郎 2008年3月 Webベース協調学習と連携した大学講義改善の実践と評価 八戸大学紀要 第36号

(鈴木, 2008)

鈴木郁生 2008年12月 大学生における授業満足度の規定因 八戸大学紀要 第37号